2025 年度こども環境学会高知大会のポスターセッションにおいて「「色」の活用は、児童の地域感をいかに高めるか：防災教育の視点から」というテーマで研究成果を発表しました。

日　時　2025 年 5 月 31 日土曜日 13 時から
場　所　高知工科大学(永国寺キャンパス)会議室
発表者　「地域の色・自分の色」研究会　代　表　照山　龍治
補助者　　会　員　宮里　耕太
**　　会　員　塩月　孝子**

発表内容

この研究は、学習院大学の秋田先生の指導の下に行った。

まず、研究の背景であるが、これから大分県を襲うであろう三大地震の津波高、震度、到達時間を整理してみると、「震源が同じでも、被災想定は、地域で全く異なる」ことが見えてきた。

そして、県地域防災計画には、東日本大震災での「防災教育の有無が子どもたちの生死を分けた」という実例を踏まえて、①学校と地域の相互補完、②先人の知恵、③自然の特徴を理解、④高い防災意識、⑤児童も避難場所を理解、ということが記載されている。

さらに、東日本大震災の避難者からは、「小学校低学年の頃、地震の時、海の近くは津波が来るから高いところに逃げると教えられ、その記憶が地震津波から私を助けた」という証言もあった。

つまり、「地域の自然や歴史、文化への関心と学びが、自然災害から子どもたちや私たちの命を守る」ということが言えると思う。

次に、研究の目的、方法、結果であるが、そこで、私たちの「地域の色の実践・学習」は、防災計画の「地域への関心と学び」に、「有効なのか」を検証し、地域の防災教育に活用できないかと考えた。

まず、研究協力校の個々の子どもたちの変化である。

授業に関心がなく、クラスから外れていた子どもたちが、泥染めなど「地域の色」の実践を取り入れ

ることで、地域の学びに向かい、クラスをリードするようになった。

その中で、私たちの実践学習は、文部科学省検定済み教科書にも取り上げられた。

次に、別府市の全幼小中と市教委に、研究会が作成した色を活用した「教材」を配布して、「色の実践」は、「地域の学び」や「授業づくり」に有効か？を調査した。

結果、全て「有効」「少し有効」と回答し、市教委は、「地域学教員研修」に「泥染め実践」を取り入れた。

姫島村でも、幼小中と村教委が、全て「有効」と回答し、小学3・4年生の全員を対象に検証実践を行った。

その中で、子どもたちから、「姫島村のこと、そして、地震津波や火山噴火の恐ろしさがよく分った」といった発言もあり、今年は、中学校で検証実践行うこととなった。

自助、近助、共助に向けては、別府市の複数の小学校で、子どもたちが捉えている「自分の地域」を調査した。

結果、「自分の地域」は「小学校区」と見ている子どもたちが多いのですが、「実践と学習」により、地域感は広がっていくことが分かった。

さらに、別府市と国東市、姫島村の協力校で、「実践と地域の学び合い」を行った。

結果、関心がなかった相手の市町村を強く意識し始め、比べることで自分の地域の特性も確かなものにしていった。

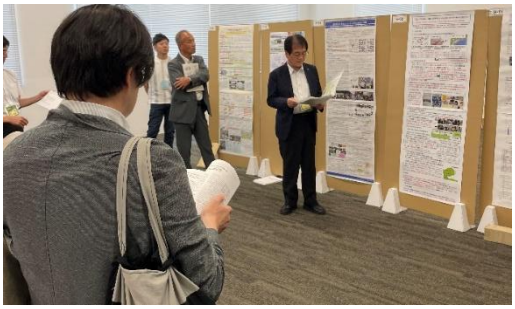
次に、考察についてであるが、

一点目は、「地域の色の実践」が、「児童の地域への関心と学び」に「有効である可能性」が示唆されたということ。

二点目は、地域防災計画の「防災教育の在り方」に「色の実践が効果をもつ可能性」が推察できたということ。

三点目は、「色を共通テーマとした地域間交流」は、児童の視野を広げ、「地域間の互助・共助・近助・公助という防災意識を育む上で、効果的な取り組みの一つになりうる」ことが確認できたということだ。

最後に、今後の課題についてであるが、「地域の色への意識」が「防災意識」と如何に繋がるかについての「精緻(せいち)な検証」が今後の課題だと考えた。



そのため、昨年度末に、学習材「ふるさとのうみとそら(地域防災)」を作成し、今年度は、この教材を活用して、火山地帯の学校、海の近くの学校、急傾斜地の学校、離島の学校で、実践・学習・検証を行い、子どもたちの地域感や防災意識の変化を、小・中学校、教育委員会と一緒に調査することとしている。